

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年3月30日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520251

研究課題名（和文） 明治期ジャパノロジーにおけるオリエンタリズムの明暗

研究課題名（英文） Studies on the bright and dark sides of orientalism in Meiji Era

研究代表者

遠田 勝（TODA MASARU）

神戸大学 国際文化学研究科 教授

研究者番号：60148484

研究成果の概要（和文）：近代日本におけるオリエンタリズムの多様な役割を検証するために、その分析の対象を欧米人のいわゆる日本論や日本人論、あるいはアカデミックな日本研究から、短い雑誌記事やフィクション・民話における「語り」に広げ、さまざまな事例を検討した。それにより、たとえば、ハーンのオリエンタリズム的物語が逆輸入され、日本の民話の語りを変容させた事例などが発見され、異文化の歪曲と圧殺という、オリエンタリズムについての西洋の公式見解とは異なる役割を論証し得た。

研究成果の概要（英文）：The term “orientalism” is widely used to describe a prejudiced Western attitude, both academic and artistic, toward the East. It is supposed to be closely related to imperialism and colonialism in the 18th and 19th centuries. However, it played a different role in Meiji Japan. It was accepted as a new way of interpretation and representation, and changed the traditional way of seeing and telling native things. We found out such cases in the writings of Basil Hall Chamberlain and Lafcadio Hearn.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2011年度 | 300,000 | 900,00 | 390,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：比較文学

1. 研究開始当初の背景 研究代表者（遠田）はこれまで、平成16年度から平成18年度の3年にわたり、科学研究費補助金を受けて、その成果報告書として「オリエンタリズムの比較研究—チェンバレンの『日本事物誌』を中心に」を刊行した。そこで明らかにしたのは、第一に、チェンバレン（B. H. Chamberlain）の主著である『日本事物誌』（Things Japanese）の初版（1890

年）から最終の第6版（1939年）までの各版の主要項目の本文の異同である。また、その成果の利用法の一例として、「対外条約」の各版の異同を比較考察し、チェンバレンが「神戸居留地」に抱いたユートピア的な市民社会の夢とその挫折の経緯を明らかにして、あわせてチェンバレンの文明観に含まれる植民地・帝国主義的な側面と、日本のナショナリズムと国民国家としての運動に抱くオ

リエンタリズム的な歪みを指摘した（「チェンバレンが神戸居留地にみた夢—『日本事物誌』異本考—」初出：神戸大学近代発行会『近代』第97号 2006年10月、上記報告書に再録）。また著作権の関係で上記報告書には収録できなかったが、TODA Masaru, (HIRAKAWA Sukehiro ed.): *Lafcadio Hearn in International Perspective* (Global Books Ltd., Kent, U.K., 2007年1月)においては、チェンバレンら当時の著名な欧米ジャパノロジストの提示した神道論と比較する形で、チェンバレンと並ぶ同時代の広義のジャパノロジストである作家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の日本論、とくにその神道論に内在するオリエンタリズムと神道のクレオール化の緊密な関係についても考察を試みた。両論文で明らかになったのは、近代欧米人が明治期の日本に対してときにまぬがれ得ない思考様式としてのオリエンタリズムと、そのオリエンタリズムのさまざまな働き方である。チェンバレンの場合、それは居留地あるいは植民地主義の擁護となりつつ、一方では近代的な国家主義を脱出するためのユートピア的幻想の源になり、日本の狂信的ナショナリズムと国家主義を批判する視座を提供した。また、ハーンの場合、チェンバレンとは逆に、キリスト教的道徳・価値観と西洋文明の絶対的優越意識を相対化する働きをし、明治期の欧米人には珍しい日本文化への全面的肯定を引き出す原動力ともなったが、一方では、伝統的神道に西洋由来の汎神論と人格神的要素を加えることで、神道をクレオール化させる原因ともなっている。ただし、そのクレオール化には、神道が現代日本に生き延びるための貴重な示唆と提案が含まれていることは、上記論文で指摘したとおりである。すなわち、日本におけるオリエンタリズムの働きは、チェンバレンとハーンというわずか二つの例からの検討でも明らかのように、異文化の歪曲と圧殺というオリエンタリズムの一般的理解とは違う、複雑な働きをしていたのである。その複雑な働きをより正確に実証するために、検討の対象をさらに広げてみるというのが、本研究に至る、当初の背景である。

2. 研究の目的 今回の研究では、前回受託した科学研究費補助金の成果を利用しつつ、ハーンやチェンバレンなどの代表的ジャパノロジストの著作におけるオリエンタリズムの働きについて、さらに事例を追加し、研究を深め、近代日本の文化史において、オリエンタリズムの果たした複雑な役割を多角的に検証する。

3. 研究の方法 近代日本におけるオリエンタリズムの多様な役割を検証するには、そ

の分析の対象を欧米人のいわゆる日本論や日本人論、あるいはアカデミックな日本研究に限定するのではなく、短い雑誌記事やフィクション、さらには日本の歴史・民話・神話の再話や解釈における「語り」にまで視野を広げる必要がある。また、そうして見出された事例を、ジャパノロジスト以外の代表的知識人、たとえば夏目漱石や漢文小説家石川鴻斎の儒教主義的作品と対比させることで、その特徴を明確化することができる。また、本来は近代西洋への輸出品である、オリエンタリズムの「語り」が逆輸入され、日本の怪談や民話の伝統的語りへを変容させた事例に注目することで、異文化の歪曲と圧殺という、オリエンタリズムについての西洋の公式見解とは異なる多様な役割を検証する。

4. 研究成果 平成21年度は、研究目的にそって、以下の2点の論文を執筆・公刊した。

① 『傷ましい仲裁の物語——「破られた約束」「お貞の話」「和解」を読む』、平成21年7月、岩波書店『文学』7・8月号 第10巻・第4号 (p.22-31)。本稿において、研究代表者（遠田）は、ハーンの主要な三つの作品に共通する構造を分析することで、ハーンが日本やほかの非西洋諸国について論述するときに見せる特異な『文明の対立の仲裁者』としてのスタンスが、彼のオリエンタリズムの際だった特徴であること、そしてそのオリエンタリズムの特徴が、一見そうした文化論、文明論とは無縁な物語文学における基本構造にもみられることを指摘し、オリエンタリズムが彼の文学的資質と個人的な家庭環境に由来していることを論証した。

② 平川祐弘編『講座小泉八雲 II ハーンの文学世界』所収「転生する女たち——鴻斎・ハーン・漱石再論」(p.102-126)、2009（平成21）年11月、新曜社。本稿においては、死を超越する愛という主題が、ひとつの物語として、漢学者の石川鴻斎からハーンに、そしてハーンの怪談から漱石の『夢十夜』へと伝承される過程を分析し、鴻斎の日本怪談の儒教化・漢文化と、ハーンの英語化・ロマン主義化が明治日本という東西文明の接点において成立した、きわめてよく似た性質の作業であったことを指摘し、日本文化を西洋文化の文脈に整合させようとするオリエンタリズムとほぼ同一の現象が、いわゆる『清末=明治の文学圏』における、日本文化の儒教的表現においても生じていたことを論証し、オリエンタリズムが優位にある文化によって劣位にある文化を表象されるときに生じる東西の普遍的現象であることを指摘し、オリエンタリズムへの新しい見方を提示した。

平成22年度は、本研究の目的にそって、

チェンバレンの『日本事物誌』の「日本人」(Japanese People)の版による本文の異同を調査し、チェンバレンの日本人論および日本観の成立過程と、ほかのジャパノロジストとの関係を明らかにする基礎作業を行いつつ、以下の英語論文を公刊した。

③ 「Transmigration of Souls and Stories: Confucianism, Orientalism, and Modernization in the Family Romances of the Meiji Japan」, 神戸大学近代発行会「近代」, 第104号, p1-19, 単著(2011)。本稿は21年度に公刊した、平川祐弘編『講座小泉八雲 II ハーンの文学世界』所収「転生する女たち——鴻斎・ハーン・漱石再論」(p.102-126)、2009(平成21)年11月、新曜社の英語版であるが、たんなる英訳ではなく、多くの新資料を追加し、海外向けに論述の視点をあらたにした別論文である。本稿においては、転生という東洋的テーマが、漢文(儒教)、英文(ロマン主義とオリエンタリズム)、近代日本語(近代日本における個人主義)というように、メディアと思想が変化することで、いかに物語そのものが変容するかを明らかにし、オリエンタリズムの新しい研究視座を提供した。また、ハーンのオリエンタリズムの産物である怪談「雪女」が、いかなる文化的思想的背景のもとに、日本の伝統的民話として受容されたかをめぐる基礎調査を行った。

平成23年度は、ひきつづき、ハーンの「雪女」が、いかなる文化的思想的背景のもとに受容されたかを調査し、その成果を21、22年度の研究成果として上に報告した3点の論文と統合し、以下の図書(単著)を刊行した。

④『〈転生〉する物語—小泉八雲と「怪談」の世界』、新曜社、266p、2011年。本書の主要部をなす「小泉八雲と日本の民話—『雪女』を中心に—」は、単純に言えば、ハーンの代表作である「雪女」の出典とその後の伝播についての考証である。ハーンが残した『怪談』のなかで、日本人にもっとも愛され、親しまれたのは、「耳なし芳一」と「雪女」であるが、しかし、「耳なし芳一」については、ハーンの依拠した原話が存在し、それがどのように加工されて、あの名作が誕生したのか、おおよその事情がわかる。それに対して、「雪女」については、確たる原拠が報告されていない。したがって、ハーンがどのような素材をもとに、あの物語を編みあげたのか、その具体的な手順や、個々の設定・描写の狙いなどがいまだに解明できていない。あの物語のどこからどこまでをハーンの創造なのか、それがまだ未確定のままなのである。

しかし、今回の調査でほぼ確定したのは、「雪女」という物語は、ハーン以前には日本語で文字に書き留められていない、つまり、

ハーンの「雪女」に似た物語は、日本の伝統的説話文学には存在しないということである。それではそうした文字の文芸ではなく、口碑の記録のほうはどうかというと、実はこちらには、ありすぎて困るほど多数の「雪女」物語が、全国各地に散在している。そうした民話のうちで、信濃と越中の国境にある白馬岳の伝説が、ハーンの「雪女」にもっともよく似ていて、ハーン研究者の一部は、調布の百姓がハーンに聞かせた話とは、この伝説にちがいないと推定してきた。ところが、ここに困った問題がひとつ出てくる。日本における口承の伝説や昔話、いわゆる民話の記録と研究のはじまりをどこに置くかについては諸説があるが、それを柳田国男の『遠野物語』とすれば、一九一〇年、また、東京朝日新聞社が全国の読者によびかけ集めた二五〇余編を整理刊行した、高木敏雄の『日本伝説集』だとすれば、一九一三年になり、いずれにしても、「雪女」を収める『怪談』が刊行された、一九〇四年のかなり後になってしまうのである。つまり、いかに古い伝説や昔話の面影を残していても、それが採集記録された民話であるかぎりには、ハーンの『怪談』以前には遡れない。そうして見出され記録された民話を、ハーンの「雪女」の出典と考えるか否かは、結局は、その民話の古さを信じるか信じないかという信仰の問題になってしまうのである。

本論文の最大の目的は、こうして膠着してしまった「雪女」の出典問題を、従来、「口承」とされてきた民話を批判的に検討しなおすことで、解決しようというものだが、その過程で、いくつか別の問題にも目を向け解決をはかっている。そのひとつは、「雪女」というモチーフがなぜ、ハーンから松谷みよ子、そして遠野の最後の語り部といわれる鈴木サツにいたるまで、これほど多くの作家や語り手によって、日本の民話として、語られなければならなかったのかという問題、さらには、そうして語り直され、語り継がれるなかで、この物語になにが付け加えられ、なにが取り除かれていったのかという物語の変容の問題である。その問題を考えるためには、まず「雪女」というモチーフの内部を探り直し、それと同時に、モチーフの外部をとりまく、社会と文化の状況を分析する必要がある。本稿では、こうした作業を慎重に積み重ねることで、ハーンの『怪談』のなかで、なぜ「雪女」だけが、かくも見事に日本の土壌に根付いてしまったのかという、「雪女」をめぐる最大の謎に、ひとつの解答を引き出すことができたうえに、『怪談』の序文における「雪女」の出典をめぐる、ハーンの謎めいた言葉にも、ひとつの解釈を与えることができた。

今回、研究代表者(遠田)が本書で明らかにしたのは、ハーンの「雪女」という作品が、

日本の民間伝承を書き改めたものではなく、ほぼ純粋なハーンの創作であり、ファミフアタール（宿命の女）や雪の女王といった西洋文学の表象に日本の伝承をまとうせ、そこに母性崇拜やマゾヒスティックなエロティシズムといったハーンの個人的な情念をそそぎこんで作り上げた、近代西洋に向けたオリエンタリズム的作品であったということである。しかし、このオリエンタリズムの作品がもっとも愛好され、大きな影響を与えたのは、意外にも、日本においてであった。翻訳された「雪女」は、いつしか日本の「古典」的物語として日本人に愛され読み継がれていった。また昭和初期には、白馬岳の口碑として書き改められ、いくつかの民話・伝説集を経由して、戦後、大ベストセラーとなった松谷みよ子の『信濃の民話』に再話され、そこから数え切れないほど多種多様な「雪女」が日本各地で土着の伝説として語られるようになった。さらには、本来はまったく別系統であるいくつかの民話や伝承とも合流していた。これは「雪女」の民話化というよりも、民話の「雪女」化というべき現象であった。

この長い不思議な伝承の連鎖のなかで、「民話」という日本の伝統的語りに取り込まれたのは、物語の表面的な素材やモチーフばかりではなかった。冬の寒さを白い魔女として擬人化すること、それがファミフアタールとして男を虜にすること、こうした西洋文学の伝統的表象に加えて、母性崇拜やマゾヒズムといったハーン固有の情念までが、民話という形式に取り込まれ、確実に、日本の大衆文化のなかに滲透していったのである。こうした「雪女」の民話化のプロセスのなかで、研究代表者（遠田）は、オリエンタリズムによる、日本の民話という伝統的語りの変革、新たな伝統の創出を見出しうることを指摘した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 遠田勝 「Transmigration of Souls and Stories: Confucianism, Orientalism, and Modernization in the Family Romances of the Meiji Japan」、査読無し、神戸大学近代発行会「近代」、第104号、2011年、p1-19、単著。

② 遠田勝 『傷ましい仲裁の物語——「破られた約束」「お貞の話」「和解」を読む』、査読無し、岩波書店『文学』、第10巻・第4号、2009年7月、(p. 22-31)、単著。

〔図書〕（計2件）

① 遠田勝 『〈転生〉する物語—小泉八雲と「怪談」の世界』、新曜社、2011年、全266ページ、単著。

② 平川祐弘編『講座小泉八雲 II ハーンの文学世界』所収、遠田勝 「転生する女たち—鴻斎・ハーン・漱石再論」、新曜社、2009年、p. 102-126、単著。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠田 勝 (TODA MASARU)

神戸大学・国際文化科学研究科・教授

研究者番号：60148484